

Philologie de la civilisation japonaise

Cours du 19 mars 2013

- Les préfaces du *Shin-kokin-shû* -

- やまとうたは、むかしあめつちひらけは
じめて、人のしわざいまださだまらざり
し時、葦原中国のことはとして、稲田
姫素鷺のさとよりぞつたはれりける。

- しかありしよりこのかた、そのみちさかりにおこり、そのながれいまにたゆることなくして、いろにふけり、こゝろをのぶるなかだちとし、世をおさめ、たみをやはらぐるみちとせり。

- 夫和歌者、群德之祖、百福之宗也。玄象天成、五際六情之義末著、素鷺地靜、三十一字之詠甫興。爾來源流寔繁、長短雖異、或抒下情而達聞、或宣上德而致化、或屬遊宴而書懷、或採艷色而寄言。誠是理世撫民之鴻徽、賞心樂事之龜鑑者也。

- かゝりければ、よゝのみかどもこれをすてたまはず、えらびをかれたる集ども、家々のもてあそびものとして、ことばの花のこれるこのもとかたく、おもひのつゆもれたるくさがくれもあるべからず。
- 是以 聖代明時、集而録之。各窮精微、何以漏脱。

- しかはあれども、いせのうみきよきなき
さのたまは、ひろふともつくることなく、
いづみのそましげき宮木は、ひくともた
ゆべからず。ものみなかくのごとし。う
たのみちまたおなじかるべし
- 然猶崑嶺之玉、採之有余。鄧林之材、伐
之無尽。物既如此、哥亦宜然。

- むかしいまときをわかたず、たかきいやしき人をきはらず、めに見えぬかみほとけのことの葉も、うばたまのゆめにつたへたる事まで、ひろくもとめ、あまねくあつめしむ。
- 不扨貴賤高下、令摭錦句玉章。神明之詞、仏陀之作、為表希夷、雜而同隸。

- 視之不見名曰夷，聽之不聞名曰希，搏之不得名曰微。此三者，不可致詰，故混而為一。

- 現大神力

十までの神のちからのきく御法 けにそ仏
のしるしなりける (106)

- 152. 神仏人までもその力にて なす事は
なる物としらすや

- はるがすみたつたの山にはつはなをしのぶより、
夏はつまごひする神なびの郭公、
秋は風にちるかづらきのもみぢ、
ふゆはしろたへのふじのたかねにゆきつも
るとしのくれまで、
みなおりにふれたるなさけなるべし。

- しかのみならず、
- たかきやにとをきをのぞみて、たみのときをしり、（賀）
- すゑのつゆもとのしづくによそへて、人のよをさとり、（哀傷）
- たまぼこのみちのべにわかれをしたひ、（離別）
- あまざるひなのながちにみやこをおもひ、（羈旅）
- たかまの山のくもゐのよそなる人をこひ、（恋）
- ながらのはしのなみにくちぬる名をおしみて、（雑）
- こゝろうちにごき、ことほかにあらはれずといふことなし。

- いはむや、すみよしの神はかたそぎのこと
との葉をのこし、伝教大師はわがたつそ
まのおもひをのべたまへり。
- かくのごとき、しらぬむかしの人のこゝ
ろをもあらはし、ゆきて見ぬさかひのほ
かのことをもしるは、たゞこのみちなら
し。
- 日域朝廷之本主也、争不賞我国之習俗。

それやまとことはといふはわか国のことわ
さとしてさかんなるものなり。

五七五七々にていつつの句あり。

五大五行を表するあるへし。

真俗これをはなれたる物なし。

真諦には五大をはなれたる物なし。

仏身より非情草木にいたる。

俗諦に又五行をはなれたる事なし。

天地よりうみ山にをよふ。

これによりておほやまとひたかみのくに
（大倭日高見国）は
とよあしはら（豊葦原）をうちはらひてひ
らけはしめしより
神々のおほんことはをつたへきたれる
このほかにさらにさきとする詞あるへから
す。

- このことほりをおもふに
いささかもからの文字にうとしとて
この国のひとはうたの道をつきに思ふへか
らす
たたこの国々の風俗なり
さらに勝劣なかるへし

若し歌の道を申まゝにおほさん人は憤鬧をす
つともおもひなし

静処をねかふとも思なし

仏道に入るとも思なし

煩惱をはなるともおもひなして

このさいう（左右）に心をとゝめて

をとりまさりをなんつけられ侍れかし

- しかはあれど、我国の言の葉より仏の道へ入らむと心ざし侍ること、美豆の御牧の深き江より起りて、鳥羽田の秋の稲に納まり侍らむ。連枝の契りにもまさり、比翼の縁よりも深かるべしとこそは神も仏も照し給ふらめと覚え侍てなん。

- 新古今の具におこしたてられて
すゑのよにとゝめ侍らはや